

# 美の闘ぎを極める

## 構造家・早稲倉章悟

朝倉幸子◎TH-1  
illustration:Taco

### ■ 構造計画プラス・ワンを率いる

構造家・金田勝徳さんが構造計画プラス・ワンを設立したのが1988年。その10年前に名古屋で次男として生を受けたのが早稲倉章悟さん。構造設計事務所も例外ではなく、どこも小規模の組織を誰が継承していくかが悩みどころだ。特に、構造家が卓越した技術力と、人としての魅力が相まって築き上げたアトリエ系事務所となるとさらに難しそうだ。金田勝徳さんへのインタビュー（本コラム47回）で、「社名に自分の名前を入れなかったのは、会社を継続していくための布石です」と語った。それは個人の組織への執着というものではなく、自分が携わった建物への責任を強く考え、建築家と協働してきた自負と役割を考えてのこと。そして後継者にしたのが、構造計画プラス・ワンの代表取締役になって3年目に入る早稲倉章悟さんであった。金田さんからその意思を伝えられたのが、入社してまだ2年目くらいの頃だったという。当時50歳代半ばの経営者が会社を託そうと決断したのが、自分より33歳年下の20歳代の若者だった。技術者として一人前になるのには10年かかるといわれていた早稲倉青年には、「後継に」の言葉の意味は、「ピンと来なかった」。物理工学科に進んだ優秀な兄への憧れや、競争心のようなものから建築を選ぶ。名古屋大学に席を置いて同大大学院で学んだ。

### ■ リーダーの条件

早稲倉さんが、技術者としての将来性が群を抜いていたとしても、経営者として適任と判断された能力はどのように培われたものなのか。それは「自分が意識して努力した結果」だったという。小中学校時代はクラス委員に指名される優良児であったというが、よくある話で優秀な子が上の学校に進学すると、まわりは皆同様に「できる子」なので萎縮してしまうことがある。そんな一人だったのが、「意識して気持ちを



切り替えた」というから早稲倉さんは素晴らしい。自主性と積極性ある態度で、勉強にも仲間との付き合いもするように努力した。リーダーとして不可欠なコミュニケーション能力をもつ人間へと自己改革したのだ。いきさつを知ってか知らずか金田さんの眼にセールスエンジニアとしてプラス・ワンの看板を背負う構造家・早稲倉章悟が見えていたのだろう。

### ■ これからの構造家像

横須賀美術館を担当して、建築家・山本理顕さんと深くかかわることができたのが構造家への指針となった。スタッフへの厳しい指導を、間近に見ることができたのも大きい。建築家として、ぎりぎりのせめぎあいの中から意匠デザインの美しさを求める姿勢。迫力ある建築家の教育に、構造の立場でも同じと感じた。山本理顕設計工場出身の設計事務所SALHAUSと金沢美術工芸大学の建設に力を入れる充実したときを過ごせるのもそれからの縁である。

横須賀美術館の監理をしているときには、金田さんと行動をともにする密な時間があった。師のやり方を見て得たものは、今の財産となっている。瑞々しい頭で吸収できた早稲倉さんだったが、金田さんが早稲倉さんを深く知ることができたともいえそうだ。

大学院では大森博司教授と「構造形態創生法」と呼ばれる構造最適化を目指した新しい構造解析手法を研究した。「力の流れに沿ってものが形づくられていく様が面白い」と語る早稲倉さんの思想の基礎になっている。2013年からJSCAのプログラム部会も務めておりますます忙しい。「エンドユーザーをいつでも意識してつくっていく。さまざまな建築の切り口に興味を持ち続けたい」。師匠譲りで、和かな表情に本心を秘めて真摯に構造界を引っ張っていく。